

オピニオン

介護の質 何とか保ちたい

社会福祉法人 呉ハレルヤ会理事長 里村佳子さん

介護の現場が新型コロナウイルスとの「闘い」に苦悩している。高齢者は感染すると重症化リスクが高い。もし高齢者施設で感染が広がれば、介護はもちろん、医療崩壊につながりかねない。呉市内でケアハウスやグループホームなどを運営している社会福祉法人 呉ハレルヤ会理事長の里村佳子さん(64)に、コロナ禍に対応した取り組みや課題について聞いた。

(論説副主幹・古川竜彦、写真・高橋洋史)

「国内で新型コロナウイルスの感染者が確認され、9カ月ほどたちます。現場はどんな状況ですか。介護施設でも感染対策が最大の課題です。感染防止の基本である「3密」の回避に苦労しています。施設のレイアウトを変えざるを得ませんが、食事や入浴、排せつといった介助は、身体的な接触を避けることができません。密着機会を減らしながら、どう介護していくのが試行錯誤を重ねています。

「どんな工夫をしているので

「デメリットは何でしょう。

介護の質を高めるには、手を握ったり背中をさすったり触れ合いによる「ケア」が重要になります。接触を控えると、利用者との信頼関係にも影響を与えかねません。これまでのやり方が180度変わりました。マスク越しの介護も悩みの種です。

「冬場になればインフルエンザへの警戒も怠りませんね。

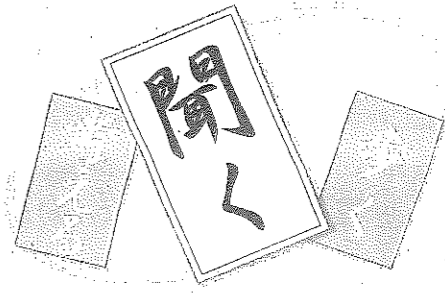
「何が問題になるのですか。認知症の場合、言葉だけではなく、顔の表情やしぐさなどを通じたコミュニケーションが欠かせません。マスクを着けると相手の表情が見えなくなり、声もこもるので会話も伝わりにくくなります。急激な環境変化がストレスになり、症状の悪化につながる場合もあります。

「感染症の「2次被害」と言えますね。

「緊急事態宣言のさなかには、入所者への面会を断った時期もありました。家族に急に会えなくなるのがきっかけになり、不安や興奮、妄想といった症状を引き起す場合があります。

「施設から感染者が出ないようにはしないとけませんね。施設崩壊だけは避けなければなりません。広島県は、応援可能な介護職員をあらかじめ登録し、感染者が出て人員不足となつた施設に派遣する制度を整えました。要請があれば、感染症が、家族と顔を合わせ、言葉を

「さとうむり・よしこ 呉市生まれ。法政大学院イノベーション・マネジメント科修士。簿記やビジネスマナーなどの講師を経て、98年社会福祉法人 呉ハレルヤ会職員。05年に施設長に就任し、19年から現職。広島国際大臨床教授、広島県認知症介護指導者。主な著書に「尊敬ある介護」など。



「と聞いています。感染者が出てもスムーズに入院でき、看護や医療面でのサポートがあれば、施設崩壊は回避できると考えています。

「うまく機能していませんか。どの施設もきりぎりのスタッフで回っています。デザイナーなどは、感染への不安から利用控えが起きて、経営面でも打撃を受けています。スタッフを派遣できるほど余裕のある施設は少ないと感じています。災害時に備える意味でも、互いに助け合う仕組みは大切です。介護施設の運営事業者が人材面でも財政面でも余裕が持てるようにはしておかないと、必要な介護サービスを提供することができなくなる恐れがあります。行政とも連携を深め、コロナ禍を乗り越えたいと思っています。

取材を終えて

人は必ず老い、衰える。介護現場の苦悩は、自分や家族の老後にとつて差し迫った問題だと受け止めるべきだろう。まず介護の仕事がどれだけ重要な役割を担っているかを正しく評価し直すことが欠かせない。

